

第一専門診療部

(1) 消化器科

国立成育医療センター初年度は香坂、田川が常勤として勤務し、国立小児病院時代からの患者様の経過をフォローしているが、外来、入院ともに手いっぱいの状態が続いており、青木幸非常勤医師の助けを借りて何とか切り抜けてきたというのが正直な感想である。

外来は月200名強で維持しており、大きな変動はなく、入院も8 - 12名の間で運用されている。遠方からの紹介や相談にも対応している。肝移植へ移行した患者は3名で、腎移植と異なり失敗が許されないだけに家族、本人も希望と本人の体調でどの時期に移植に踏み切るかは難しい問題を含んでいる。胆道閉鎖症、アラジール症候群などのうっ滞性肝障害は最も多い例を経過観察しているが、長期的な予後をどのようにして改善していくかは難しい課題である。肝炎および肝障害を伴う全身性疾患、若年関節リウマチや血球貪食症候群の例も重症例が多い。このような例では免疫学的機序も重要となり、今後の治療法の展開で、血漿交換に変わるべき治療法の開発を試みたい。肝腎疾患では、C型肝炎や膜性腎症の治療でインターフェロン投与の有効率が6 - 7割を完治させており、今後もこの強化プロトコールに沿った治療を続ける予定である。腸疾患では炎症性腸疾患が主な疾患であるが、近年その治療方法は大きく変わりつつある。

入院症例

1) 消化管疾患

炎症性腸疾患では潰瘍性大腸炎初発5例、クローン病初発1例を入院加療している。ステロイドを使用していない1例を除き速やかな寛解導入を認めている。クローン病も栄養療法と薬物療法の併用で寛解導入を認めている。しかしどちらの疾患も寛解維持には症例毎に工夫が必要とされるので、いかに副作用が少なく長期に寛解を維持できるかは今後の課題である。維持療法では白血球除去を1例に施行して経過を見ている。

炎症性腸疾患以外では、慢性下痢、蛋白漏出性胃腸症、胃食道逆流、過敏性腸症が入院となった。適切な栄養療法や薬物療法で改善している。

2) 肝臓疾患

胆道閉鎖症は3例あり、当院で外科治療を受け経過は順調である。ウイルス感染合併を示唆するデータが得られ、胆道閉鎖症の成因を考える上で興味深い。長期経過観察患者は胆管炎合併や食道静脈瘤処置で入院となっている。肝移植後のサイトメガロウイルス感染症は拒絶なく治癒した。成人となり、無事出産を終えた例も経験している。

C型肝炎では6例にインターフェロン治療を導入した。1例は無反応例であったが、5例はRNAが陰性化した。長期予後は現在経過観察中である。

他の肝疾患では、非肝炎ウイルス性肝炎、肝硬変、肝腫瘍、全身性疾患に伴う肝障害(若年関節リウマチ、急性白血病)が入院となった。

3) その他

消化管、肝臓疾患以外にも、国立小児病院腎消化器科時代から通院中の腎疾患患者が若干名入院した。経皮的腎生検や維持血液透析、腹膜透析導入となっている。